

〈資料紹介〉

「大江山絵詞（酒天童子絵巻）」の詞書釈文
——逸翁美術館本と陽明文庫本との比較を兼ねて——

The Sentence of Story of “Oeyama Ekotoba” (“Shuten Doji Emaki”):
A Comparison of the Versions Held by Itsuo Art Museum and Yomei Bunko

鈴木 哲雄
SUZUKI Tetsuo

一 はじめに

この資料紹介は、錯簡・欠落の多い逸翁美術館本「大江山絵詞（酒天童子絵巻）」（二巻）の復元案にもとづいて詞書を整理し、上下二巻の各段の釈文を提示するとともに、逸翁美術館本の前欠部分を大幅に補ってくれる陽明文庫本「酒天童子物語絵巻」（二紙）の釈文も合わせて示すものである。

現状の逸翁美術館本の二巻は、詞書が上巻五段、下巻六段で、絵の部分の上巻一一図、下巻九図となっており、これとは別に「詞書巻」（別巻詞書）四段分が付随している。静嘉堂文庫本「大江山酒顛童子絵詞」（色川三中による写本）には、逸翁美術館本「別巻詞書」に欠失している一紙（二段分）が写されている。ただし、「詞書巻」

が別に存在すること、そして「酒天童子物語 絵巻」との表題のある陽明文庫本が、段ごとに区分されずに書き継がれていることからすると、逸翁美術館本の祖本やあるいは逸翁美術館本そのものも絵と詞書は別々に仕立てられていた可能性もあるが、当面は絵と詞書が交互に貼り継がれて段を構成し、それが上下二巻の卷子に装丁されていたとしておく。

すでに欠失や錯簡箇所指摘、そしてそれに対する復元案は、横山愛氏や榊原悟氏、さらに高橋昌明氏によって示めされている（一）。これまでのところ、榊原氏の復元案を修正した高橋氏による復元案（上巻一〇段、下巻九段）がもつとも整合的である。ただし、高橋氏は復元案で、上巻・第七段として、「詞書も絵画部分も失われているが、酩酊した童子が臥戸に入る段があったのでは」と推定しているが、私はもともとない可能性が高いと考えており、本紹介

でも、上巻は十段ではなく九段とし、上巻九段、下巻九段として詞書釈文を提示する。陽明文庫本は絵もなく、段落の区分もないが、高橋氏の復元案にもとづいて、上巻の第一段から第三段に分けて紹介する。

周知のように、これまでにいくつかの釈文がある(2)が、高橋氏による復元案にもとづく詞書釈文の整理は行われていない(3)。本紹介は、これまでの釈文を前提に、逸翁美術館本の詞書釈文については、『続日本の絵巻26』(中央公論社、一九九三年)と図録『絵巻大江山酒呑童子・芦引絵の世界』(逸翁美術館、二〇一二年)、静嘉堂文庫本「大江山酒顛童子絵詞」によって、陽明文庫本については、二〇一二年一〇月に同文庫での調査時に名和修文庫長のご許可で撮影した写真によって、校合したものである。

なお、「大江山絵詞(酒天童子絵巻)」の制作や伝来、その解釈などについては、拙著『酒天童子絵巻の謎―「大江山絵詞」と坂東武士』(岩波書店、二〇一九年)で検討したところであり、研究史等についても、拙著を参照願いたい。

また、参考として、陽明文庫本と逸翁美術館本の詞書との重複部分で、表記が相違する箇所について、一覧にして提示した。両本の相違点は、両本の性格付けや諸本との系譜関係をめぐる重要な情報であり、不十分ながらも拙著において、本学国文学科の加藤浩二氏のご教示も得ながら検討しておいた。本紹介は、今後の研究の便宜をはかるとともに、拙著の当該箇所の論証を補うものである。

凡例

二 「大江山絵詞(酒天童子絵巻)」の詞書

- 1 字体は原則として常用漢字、それ以外は正字を用いたが、異体字等は適宜残したものもある。
- 2 仮名遣いは、原則として原資料のまま表記したが、変体仮名は、原資料の文体にあわせて平仮名あるいは片仮名に直した。
- 3 繰り返し記号は、漢字↓々、平仮名↓、とし、くなどはそのまま使用するのを原則とした。
- 4 便宜、読点などをつけた。
- 5 挿入記号は、資料の該当箇所に。をつけ、挿入されるべき文字をその右に付した。
- 6 追筆の朱書は『』で表した。
- 7 校訂の注や補字・訂正等は「」で表し、意味の取れなかつた箇所は「ママ」と記した。この点、ご教示をお願いしたい。
- 8 文字が虫食い等で判読できない場合、字数が推定できる場合は原則として二文字までは□□で、三文字以上場合は「」で表し、「」内にはおおよその字数を充てた。文書の上下が欠損して字数が不明の場合は、「」とした。
- 9 陽明文庫本からの釈文は、ゴチック体で表記した。
- 10 絵の位置についても示したが、各段の絵そのものと粗筋については、前掲拙著の第一章を参照のこと。

【上巻・第一段（絵あり。詞書はすべて陽明文庫本）】

*陽明文庫本は、冒頭に「酒天童子物語 絵詞」との表題が本文と同筆で記載されている。

夫、徳政をもて国を治時は、則、仏神、覆護して玄応をたれ、応善をもて世を祈ときは、又、星宿、随喜して当生を利したまふ、しかれども、青異黄軒のすなをなりし昔も、邪魔悪鬼はしつ□□三代二漢のをさまりし古□□は、是そむぎやすし、爰以□□申は、神武帝、功をひらき□□かに六十六代の御門に相当□□つ日数をかそふれば、星霜□□千六百四十余廻に及にけり、御年七歳にして帝位につき、九歳にして詩筆にたつさはり給へり、さきには、政を文学にかきて、あまねく百家に通し、後には、妄相を真如にとらかして、ふかく三宝に帰し給き、凡、夫、在位廿六年のあひた、南面の化、実に惠露世をうるをし、左言の心、さらになをくきてうにみり、されは一天、皆聖猷をあふきたてまつり、万人、権化とうたかひ申、徳はさらに八埏のみちをたらす、三□□あをつき、政は又四海の□□む、二帝の善政、流をう□□は、秋の霜のこたく、其恩□□似たり、十善を四海に□□を一子になて給しかは、花□□まちに帰伏して、臣妾、皆感喜をすといふことなし、此時を得て、顕教蜜宗のしなくなる、ともに現証をあらはし、左文右武のまちくなる、たかひに能芸をあらそひ、医算のたくひ、おのく妙功をぬきいつ、名は往生よりもたかく、陰陽の輩、術徳をほとこす、ほまれは、後代にしにきけり、王侯相将よりはしめて、緇素男女におよふまで、其仁、風にそみ、其恩、波に浴せずといふことなし、是則、四賢齊信、公任、行成、俊賢、各実をほとこす、百官ことくく、行を□□かゆへなり、しかれと

も確を□□おほき時は、十堯九舜も□□さはりをなす、魔あつま□□護神、智もをかされ給□□始のころより、正曆年中にい□□ひそかに都鄙の貴賤をうしなひ、遠近の男女をほろほすことあり、九重の卿相侍臣よりはしめて、諸国の上下土民にいたるまで、或は父母兄弟にわかれて、むねをこかすともからもあり、或は妻子眷属を失て、袖をうるをすやからもあり、洛中洛外にかなしみの涙尽かたく、村南村北になくこゑたえさりけり、つねは暴風雷雨して、変異奇特のことも有けり、上臥したるわか殿上人、しかるへき人々の姫君、北方、つほね、まちの女童部にいたるまで、其数おほくうせ行けり、暫は世をうらみ、身をなきて出□□たるなどあやふみ、うたかふほ□□なりければ、これたゝことにあ□□天魔のしわざとぞ、なけ□□よつて、諸寺諸社に仰て、大□□せらるといへとも、貴僧高僧、其□□あらはしかたく、靈佛靈社、加護もむなしきにゝたり、古世の語に、無為の世にいたり、有苗の伐あり、垂拱の時にも遂鹿の戦ありなど、かきをかれたるも、おもひあはせられ侍にや、其比、清明といふ者有けり、陰陽卜巫の術掌をさすにたり、天変地変、目に見かことし、すなはち、めされて御占ありけるに、うらなひ申ていはく、帝都より西北にあたりて、大江山といふ山有、かの所にすむ鬼王の所行なり、時うつり日かさなりては、九重の上下諸国の人民一人として、跡をとゝむへからす、相構て、君にも心をかけたてまつるといへとも、長時、不断の御行、たゆませ給はさるあひた、□□伺かねたるよし、かんかへ申けれ□□闕を始として、竹園蓮府□□悲歎せずといふことなし、□□（上巻・第二段に続く）

〔絵（二場面）〕①安倍晴明が陽明門から内裏の宜陽殿に召される。

② 晴明の占いが公卿等の参内する紫宸殿東の軒廊へと届けられる。

【上巻・第二段（絵あり。詞書は一紙分を除き陽明文庫本）】

「道のうち、うれへあまなく」 「ほかまで、さはきにそなり」
 「諸司八省、心をまほりにして」 「神威の前にめくらし、文
 客武将は実を拙て、才智を南北のもとにつかしつゝ、かの天魔の暴
 逆のしりそけて、此貴賤の愁歎をやすめんとそせられる、公卿僉
 儀、度々におよびて後、右心みにいはく、朝家に文武の二道を定置
 るゝ事、文をもて、

〈逸翁美術館本との重複箇所〉

『萬機の政務をとり、武をもては、諸国の乱逆をうちしつめんかた
 めなり、すみやかに、致頼、々信、維衡、保昌等をめされて、この
 むねを仰ふくめらるへしと定申されければ、すなわち、四人の武士
 をめして此由を仰す、各申けるは、まことに弓箭の「朝敵
 をたいらげんかためな」 「辞申におよはず、五材四」 「左車
 右馬のはかりことを「いへとも、これはすかたをみさる」 「
 「きかさる鬼神なり、合戦」 「人力及かたきよしをそ申」
 「院の左大将実躬卿、其時中納言にてをはしけるか、申され
 けるは、かゝる変化の者も王土にあとをとゝめながら、いかでか天
 氣にしたかはさるへきとなむ、〔平出力〕
 撰津守頼光、丹後守保昌二人に仰られて、めされるへきよし申され
 ければ、諸卿一同して両将をめされぬ、我朝の天下の大事、これに
 すくへからず、各武勇の心さしをはけまして、速に凶害の輩をしつ
 むへしと仰ふくめられしかは、各畏て罷出ぬ、煙霞東西に心なけれ

とも、風にあふときはたちまちに飛行す、これすなわち、順の徳也、
 人臣は遠近におよひなければ、命をふくむ時は馳走す、これすな
 わち、「たるをや、兩輩、各宿所へ退」 「言そむきかたか
 りし間、お別を、しむ、」(続)

〈逸翁美術館本〉

〔前紙欠〕

万機の政務をとり、武をもては、諸国の乱逆をうちしつめんかた
 なり、速に、致頼、々信、維衡、保昌等を召れて、此旨を仰含ら
 るへしと定申ければ、即、四人の武士を召て此由を仰す、各申され
 けるは、誠に弓箭の道には、偏朝敵を平けんかため也、夫、仰を
 辞申におよはず、五材四義に忠をつくし、左車右馬のはかりこと
 をめくらすへしといへとも、是はすかたをみさる天魔、声をきかさ
 る鬼神也、合戦をとくる事、人力およひかたき由をそ申ける、爰、
 閑院の右大将実見の卿、其時、中納言にておはしけるか、申されけ
 るは、かゝる変化の者も王土に跡をとゝめながら、争か天氣にした
 かはさるへき、撰津守頼光、丹後守保昌等に仰せられて、めさるへ
 き由を申されければ、諸卿一同して両将をめされぬ、我朝の天下の
 大事、これに過へからず、各武勇の志をはけまして、速に凶害の輩
 をしつむへしと仰含られしかは、各畏て罷出らる、煙霞は東西に心
 なけれども、風にあふ時は忽に飛行す、是則、順の徳なり、人臣は
 遠近におよひなければ、命をふくむ時は馳走す、是則、忠のいた
 るなるかなや、兩輩、各宿所へ退出して、緘言そむきかたかりし間、
 思々に出立けり、別を惜む、

〔次紙欠〕

妻妾あり□ □孫子あり、たかひに心をく□ □もよをす、たのむかたとては只□ □の守護氏寺の佛陀の加護□ □光は八幡三所、日吉山王ねんこ□ □祈念し、保昌は熊野三所、住吉明神と再三祈申て、神馬并に種々重宝、色々の幣帛を別当、神主等にたてまつらる、是則、ことゆへなく朝敵をほろぼして、再会を期せんとなり、すてに発向と聞しかは近国の武士数万騎をあひもよをすて、二人の將軍にさしそへられけり、爰、頼光申けるは、朝敵をうたんことかならずしも勢によるへからず、且はかれらか妻子の歎も不便なり、王威むなしからずは、宣旨、豈ゆるなるへしやとて、とめをかれしかは、各悦の涙を、さへてと、まりぬ、死も生も一所にと契をふかくする郎等、頼□□□網□□公時、貞通、季武四人□ □主従共に五騎也、保昌の□□幸小監はかりなり、かれこれ□ □ひたれ、色々の鎧きて、参□ □ならひに宣旨を給て出け□ □地の錦の直垂に、いとをとし□ □頭のかふとをもたせたり、大中黒のそや廿四さしたるを、かしらたかにをひしけとうのゆみをつ系につき、金作の太刀の三尺五寸なるをさけはきたり、保昌は赤地錦鎧直垂に、むらさきすその鎧に、くわかたうちたるかふともたせて、たかうすへの征矢おひて、ふしまぎの弓つへにつき、白きひるまぎの太刀に、虎皮のしんざや入てはき、庭上にゆるきいてたるけしき、まことにあたりをばらひてそみえける、のこりの郎等共も、ともせんとはやりけれとも、妻子なども、さすか心くるしくやありけん、かれらにつ、けて、みなと、めければ、心ならずと、まりぬ、さりけれとも京中はかりは共したりけり、禁中の卿□ □洛中の貴賤万人にいた□ □みる輩、稻麻竹葦の□ □下にみちく、門前市□ □上巻・第三段に続く

〔絵二場面〕①両将が紫宸殿の階下に座し、追討宣旨を受ける。

②騎馬武者姿の頼光・保昌一行の出で立ちを見送る都人。／なお、三人の泣く女性が宜陽殿の入口、紫宸殿東の軒廊、そして見送る人々のなかに見える。

【上巻・第三段（絵あり。詞書は一紙分を除き陽明文庫本）】

□元年十一月一日帝都をい□ □王のすみかときく、大江山いく□ □る、とそわけ、すてにかの大江山を尋入、谷々峯々に日をかさね、よをかさねてもとめけれとも、樵溪跡たえて、雲海のうみをへたて、群源きしをあらひて、煙波まなこをさいきりり、山よりなを山に入、谷より又谷につたへとも、あやしきこともみえさりしかは、頼光の給けるは、王敵をうちたいらけすは、なかく都へ帰へらすといはれければ、保昌、尤可然とて、実跡同心、こ、やかしこやたつねゆくに、巖岨みちほそくして、身をそはめて入所もあり、溪樹枝をうなたれて、頭をかたふけてゆくところもあり、所々の苦行は霞にうつみて跡もたへ、こゑく□ □はあらしにたくひて、かすか□ □し、そらす、けわたりて□ □けしきなにとなく、お□ □みねには陰雲ありて、斜□ □すさまし、木には芳樹な□ □よそをひかるし、あそふ鳥の□ □雲に宿するかたらひさむく、た□ □さるの木をいたひて、月にさけふこゑよりほかは、おとする物そなかりける、さる程に、ある山のほこらのみやれば、あやしきことも侍りけり、かのすかた白髪なる老翁一人、としたかき山臥、老僧や若き僧、各一人つ、種々酒肴用意して、柴宿さして唐櫃とかきすへて、人をあひまつ

(続く)

《逸翁美術館本との重複箇所》

『けしきなり、各これを見て、うたかひなき変化の者と思ければ、太刀をぬぎ、弓をひきてむかふ処に、白翁すゝみ出て、きものをぬきかけて、はたかになりて、手をあはせていひけるは、をそれあやしみ給ことなかれ、各をまちたてまつるなり、そのゆへは翁は□□六七人もちたりしを、一人□□王にとりうしなはれて、こ□□かはかりとかおもひ給、かの山□□とられ、この若僧は弟子□□なひてなげき給へは、両□□うけ給て、鬼城へたつねむ□□をつたへうけ給はるあひた、よろ□□して、我等も御共仕て、心のゆくかたと、かのところへあひむかはんためなりとかたりけるに、頼光の給けるは、かくの給へはとて、心をゆるしたてまつるには侍らねとも、我等、宣言をくひにかけて侍れば、我等か身には何事か侍らんとて、太刀を、さめ、弓をなをして、各用意の飯酒ともに至極して、鬼城をもとめいたすへきとはかるところに、白翁申けるは、そのすかたともにては、たつね給はんことかなふへからず、たとひ兄弟なりとも、いかてかたやすくあふことをうへぎ、すかたをやつし、やうをかへて、たつねみ給へとて、唐櫃の中より□□、柿の袈裟、頭巾など、り□□にきて、おといふ物九ちやう□□なかり取出して、かのを□□』(続く)

《逸翁美術館本》

(前紙欠)

けしき也、各是をみて、無疑変化の物と思はれければ、太刀をぬぎ、弓を引てむかふところに、白翁すゝみいてゝ、きものをぬきかけて、はたかになりて、手を合ていひけるは、おそれあやしみ給ふ事なか

れ、各を待たてまつるなり、其故はおきな子共六七人もちたりしを、一人ならず鬼王にとり失はれて、此歎いかばかりとか思給ふ、彼山臥は同行あまたとられ、此若僧は弟子、師匠を失なひて歎給へは、両将宣言を給はりて、鬼城へ尋向給由を伝承はる間、悦をなし、我等も御共つかまつりて、心のゆくかたと、彼所へ相向はんかためなりとかたり申けるに、頼光のたまひけるは、かくのたまへとも、全、心をゆるしたてまつるにはあらずなれとも、我等は、宣言を頸にかけて侍れば、我等か身には何事かあるへきとて、太刀をおさめ、弓をゆるしぬ、各用意の飯酒ともに至極おこなひて、鬼城を求出へき様をはからふところに、白翁申されけるは、其すかた共にては、尋給はん事かなふへからず、縦あにおとゝなりとも、いかてかたやすくあふ事をうへぎ、すかたをやつして、様をかへて、尋み給へとて、唐櫃の中より、柿衣、柿袈裟、頭巾なんと取いたして、とりくゝに負といふ物九丁、おなしく櫃中よりとりいたして、彼負に甲冑

(次紙欠)

酒香を取入てからけし□□^{保昌カ}、山臥、老僧、若僧、綱、公時、^{真通}□□、^季武、独武者など九人は、九ちや□□をかけて、白翁と頼光は、先達のことくに檜杖といふ物をつきてあゆみ、つゝきける馬をは、是より舍人男に、みなふるさとへそ、かへしつかはしける、

(陽明文庫本終わり)

(絵(三場面))

①深山幽谷に分け入る一行。②洞での老翁、山伏、老僧、若僧との対面、飯酒の櫃には「死筒の酒」も見える。③老翁・頼光を先達として山伏姿で大江山の鬼城にいそぐ一行二名。

【上巻・第四段（絵あり。二紙）】

（前紙欠。岩穴を抜ける場面があったと推定されている）

たり、頭には黒髪もなく白髪なるか、かほはせ、たとへむ方なし、色々さま／＼に、血のつきたる物をあらひて、木の枝にかけ、岩のかとなんとにほしかけたり、人々是を見て、無疑変化の物よと思て、忽に命を失てんとする所に、女、手を合て、我更ニ鬼神変化の物にあらず、本はよな生田うたの里の賤女にて侍しか、おもはぬ外に、鬼王にとられて此所に来て侍し時、骨こはく筋たかして捨られしか、この器量の者として、かゝるきものをあらはせらるゝなり、古里もゆかしく、したしき者も恋しけれども、春行、秋たけて、既に二百余廻の年月をかさねたり、さても此人々はいかにして、是へは、おはしぬるにか、速に疾帰給へ、此所は遙ニ人間の里をはなれたり、齡しかも盛なる人々也、いとかなしくこそ覚ゆれと申ければ、頼光問給けるは、此山は大江山の奥也、人間をはなれたるとはなに事そとの給へは、老女、答けるは、是へおはしつる道には岩穴のありつるそかし、其穴より此方は、鬼かくしの里と申所なりとぞ申ける、保昌、賤女にまた問れけるは、さて此所のありさま、くはしくかたり申せ、王の宣旨を蒙て、尋来れる也との給へは、さてはありのまゝに申すへしとて、鬼王の城は此上に侍る也、八足の門を立て、酒天童子と額をは書たる由をぞ聞侍し、彼亭主の鬼王、かりに童子の姿に変して、酒を愛する也、九重の内より、公卿、殿上人の姫君、北方、貴賤上下とりあつめて、料理包丁してくひ物とす、此比、都に晴明と申なる、泰山府君を祭給ふによりて、式神、護法障なく、国土を廻りて守護し給ふ故に、都より人をも取得すして帰る時は、すゝろに腹をすゑかねて、胸をたゝき齒をくひしはりて、眼をいか

らかして侍る也、つれ／＼なるまゝに、笛を吹て遊給ふ、不思議なる事の侍るは、天台座主慈覚大師慈の御弟子、御堂の入道殿の御子のおさなき児をとりて、鉄石の籠にこめたまてまつる所に、彼児、無他念、法花経を奉読給ふ御声、曉さまには是まで聞へ侍そや、か様にいきながら、魔道の報をうけて侍れば、其罪業を悲しく思に、此御経の御声を承はるにこそ、罪障も消滅せうじやくするらんと忝侍る、又慈覚大師の手つから、自ら行給へはや、彼一乗守護のために、諸天善神、雨のことくに集り、雲のことくに来て、夙夜、不斷に修行し給へるに、鬼王ももちあつかひて侍る由をぞ語ける、

〔絵（二場面のみ）〕①川辺で血の付いた着物を洗う老女と出合い、

老女から鬼城について話を聞く一行。

【上巻・第五段（絵あり。二紙）】

賤女の詞に随て、此所をすこしあゆみのほりて見れば、誠に八足の大門あり、門の柱扉はうつくしく殊勝にして、あたりもかゝやく程也、四方の山は瑠璃のことし、地は水精のすなをまきたるに似たり、各これを見るに、石室、霜ふかくして、迦葉の洞に来れるかと疑ひ、蘿徑らけい、雪あさくして、懺悔の庭にのそめるかことし、頼光、綱をぬめて、門の内へ入て案内きけとの給へは、綱、忽に焚噲ぼんたか思をなし、て、たゝ一人、門の内へ入て、寝殿とおほしき所へ、さしまはりて、物申さんとたからかに申ければ、内よりけたかくゆゝしき声にて、なに物ぞと答て、出たる人を見れば、一丈計なる大の童の練ぬきの小袖に大口大口ふみくるみて、笛もちたる手にて簾かきあけて、誰人ぞと問、まなこ井まなこことから、けたかくゆゝしき気色にてそ有ける、綱、すこしもさはかず、諸国修行の者、山臥共十余人侍るか、道にふみ

まよひて是までまいるなり、御やと給らんと申ければ、童子、さらは惣門のきはなる廊へ入たてまつれとて、案内者の女房そへたり、此女房、綱か前にたち、ゆく／＼袖をかほにあて、さめ／＼と泣ければ、綱、事の故を問に、女房、答けるは、御すかたを見たてまつるに修行者にこそおはしますめれ、是へおはしな午後、いきて古郷へ帰る事あるへからず、いとをしく、かなしくこそ思ひたてまつれ、我は是、土御門の内府宗成卿の第三のむすめなり、過秋の比、月を詠し程に、あえなくとられて、心うきめをは見る也、すこしも心にたかふものは、くた物となつて、座をかへす、くらひ侍れは、目の前に見るも心うし、今日や身のうゑにならむすらんと思ふに、雪山せんざんの鳥の心地して、悲しく心うく侍ると申、かゝるを聞に、ゆゑしき事を聞物かなとおもへとも、さらぬ牀にもてなして、門のきはなる廊へ人々をも入たてまつりぬ、

〔絵 三場面〕①鬼城の大門前に到着し、渡辺綱を亭内に差し向ける。②寝殿から姿を見せる酒天童子と綱を案内する女房。③惣門際の廊に案内された一行。

【上巻・第六段(絵あり)】

其後、とはかり有て、容顔美麗ノ女房達、円座十枚マツもてきて、此人々にしかせけり、銀の瓶子の大やかなるに酒入、金の鉢ハチなどに、なにの肉やらん、いとたかくもりあけて、もちつゝ来り、彼もろこしの張文成といひし人か、仙窟せんくつにいたりて、神女にあひなれけん。かくや有けんとおほえける、頼光、保昌、同詞におなしくは、亭主の御出あらんこそ面白く侍るへけれ、我等はかりは珍からぬ同行共にてあるといはれければ、暫ありて亭主の童子いてきたり、たけ

一丈計なるか、眼井まなび、ことから、誠にかしこく、智ちふかけにて、色々の小袖に、白き袴に、香の水干をそきたりける、うつくしき女房達四五人に、或は円座、或は脇息もたせて、あたりもかゝやく計に、ゆゑしく見えし、童子、頼光に問申されけるは、御修行者何方より何なる所へとて御出候けるそと問ひければ、答こたられけるは、諸国一見のためにまかり出たるか、すゝろに山にふみ迷て是まで来る由をそ答られける、童子又、我身のありさまを心にかけて語り、我は是、酒をふかく愛するもの也、されは眷属等には酒天童子と異名によひつけられ侍也、古はよな、平野山を重代の私領として罷過しを、伝教大師といひし不思議房か此山を點し取て、峯には根本中堂を立、ふもとには七社の靈神を崇たてまつらんとせられしを、年来の住所なれば、且は名残も惜く覚え、且は栖かもなかりし事の口惜きに、楠木に変して度々障碍をなし、妨け侍りしかは、大師房、此木を切、地を平けて、あけなはと侍し程に、其夜の中に、又先のよりも大なる楠木に変して侍りしを、伝教房、不思議かなと思ひて、結界封し給し上、阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみやくさんぼつじの仏達、我立楠に冥加あらせ給へと、申されしかは、心はたけくおもへとも、力不及、あらはれ出て、さらは居所をあたへ給へと愁申せしによて、近江国か、山、大師房か領なりしを得たりしかは、さらはとて、彼山にすみかえてありし程に、桓武天皇、又勅使を立て、宣旨をよまれしかは、王土にありながら勅命さすかに背かたかりしうゑ、天使来て追出せしかは、無力して、又此山を迷出で、立やとるへき栖もなかりし事の口惜きに、風に託たくし雲に乗て、暫はうかれ侍し程に、時々其怨念の催時は悪心出来て、大風と成り、早魃さつとなりて、国土にあたをなして心をなくさみ侍りき、然に、仁明の御宇かとよ、嘉祥二年の比より、

此所に住そめて侍るか、かゝる賢王にあひたてまつりて侍る時、我等か威勢も心にまかせ侍る也、其故は、王威ゆるければ民の力衰へ、佛神の加護うすければ、国土衰弊する事にて、愚王にあふ時は、童心もいふ甲斐なくなり、賢王、賢人の代にあふ時は、我等か通方も侍るなり、昔物語はしつかに申てきかせまいらせん、先、一献とて酒をすゝむ、頼光の給けるは、童子にておはしますうゑは兒にてこそおはしませ、御さきにはいかてか、さかつきはとるへき、先々との給へは、童子、うちわらひて、この御詞にこそおめ侍れとて、さかつきを取て三盃して、御詞に付てとて頼光にさす、うけてのまんとするに、なまくさく、むつけき事かきりなし、さりけれども、おこの気色もなく、しつゝとのみて、保昌にさゝれぬ、保昌のむよししてすてられぬ、さる所に老翁、山臥等、御酒は給はり侍ぬ、我等か中に山臥の死筒とて用意したる物侍り、此御前にて取出さては、いつの時を可期し侍るへきとて、負の中より筒取出てすゝめけり、飲は取出く、我おとらしとしぬたりけり、

〔絵（二場面）〕①廊で酒天童子と飯酒を重ねて、童子の身の上話を聞く一行。／中央に「死筒の酒」（酒壺）が見える。

【上巻・第七段（絵あり）】

今は日のくるゝを相待ところに、眷属の鬼共、此人々をはからんとや思けん、容只美麗なる女房達に変して、かさねきぬともをきかざりて、五六人はかりうちつれて、山臥達のまへにきたれり、なといひやりたる事はなくて、かたちつくりを、しきりにしけり、陽台の朝の雲に袖をかさね、洛浦の神皇にましわりをむすふかとぞ、おほえし、保昌のたまひけるは、山臥修行者の居所に、女房達の来

れる事、心へかたし、すみやかに罷出よとの給へとも、耳にも聞入すして居けるを、頼光、目を暫もはなたれず、にらみてまほられければ、おもはやく、そそろわしけに成て、漸しりそき、のきけるか、申けるは、此人々の中には此山臥そ、ゆへある人と見へ給ふ、眼井のむつかしさ、いふせし、いさやとて、各か本躰をあらはして、かきけつやうに逃走、うせにけり、

〔絵（二場面）〕①廊内で頼光・保昌一行を謀ろうとする「美麗な女房」たち。②頼光に睨みつけられ、正体を現して退散する鬼たち。

【上巻・第八段（絵あり）】

其後は、いく程なく、黒雲にわか立くたりて、四方は闇夜のことし、つくさき風、あらくふき、振動、雷電、なのめならず、こはいかなる事の、あらんするそと見るところに、種々無尽の、変化の物共、せいも大きに、かたちもおそろしけにて、田楽をしてとをりけり、

〔絵（二場面）〕①頼光一行のいる廊の前を田楽をして通る変化の者ども。

【上巻・第九段（絵あり）】

打つゝきて、又、此変化のものとも、やうくの渡物をそしける、面もとりくゝに、姿もさまゝ也、或は、をかしきありさまなる物もあり、或は、うつくしき気色したる物もあり、おそろしく、心もうこきぬへき物もあり、筆にも、かきしるしかたく、詞にも、いひしらぬさまなれば、各、是を見られけるに、頼光、させき居つくる

いて、面もふらす、目をもはなたす、暫くまほりて、おはしければ、眼の底より、五色の光ぞ、出たりける、変化の物共、申けるは、あの山臥は見らるゝか、眼のひかり、顔のあらたち、つねの人にはかはりて見ゆ、当時都にあまねく人々の、おそれをのゝくなる、源頼光とかや申人こそ、眼の底は光るなれ、それならては、かゝる人も、又ありける物かな、我等か類の、あさむき、なふるへき、人にはあらずとて、うしろさまに、あはてゝ、東西に走散、巖石にたうれふしてぞ、にけのきける、

〔絵(二場面)〕①再び変化の者どもが様々な姿で行列し、田楽囃子をして通る。

【下巻・第二段(絵あり)】

(前紙欠カ)

室をかまへて、都鄙の老少をこめをく、又、忍ひ声にて経を誦奉る声のしければ、いかなる人そと思ひて、声をしるへにゆきて見れば、銅の籠を作て、女房四^五人こめおきたる中に、いと清けなる児の、十四五はかりなるか、練貫の小袖に白き大口きて、守より、小経を取出て、涙の露に點をそへて、よまるゝにそ有ける、此児の左右を見れば、十羅刹女、もろゝの天菓を置いて、外に種々にかたちを現して守護す、又、薬師の十二神将は、このかうしの外にかたちを現して守給ふ、又、不動の炎光のことに、火もゑあかりたる、猿一疋そ立たりける、是を見て、頼光、これはいかなる事にやと尋給へは、白翁、答けるは、此児、法花経を誦誦し奉る功によりて、十羅刹、此所に来臨して擁護し給ふ也、又、十二神将は、此児の師匠、七佛薬師を行し給故に、守護して、眷属の十二神^神来て、まほり給ふ、

又、猿の様なる物はよな、あれこそ、叡山早尾権現よ、かの本地、大聖不動明王なれば、生々而加護の誓といひ、猿は又、山王の使者、かれこれ両形をあらはして、まほり給ふ也とぞ、の給ける、頼光は、此白翁もとより、あやしく思はれけり、まことに権現の加護にあらすは、天魔の凶悪をしつめかたし、ひとへに是、年来日来、憑をかけたる霊神の化現かやと、感喜^{かんき}あひならひければ、保昌とひそかに目を見合て、うなつき給けり、此児と申は、さきの老女か語つる、慈覚大師の御弟子、御堂の入道殿の御息、是也、

〔絵(二場面)〕①変化の者どもが控える建物のなかを覗う蓑帽子姿の三人(薄衣着色で透明であることを示している)。②

牢屋に閉じ込められた人々を確認する同じ三人。牢屋の奥には御堂入道の御子が法華経を誦誦する姿があり、格子の外にはその子息を守る十羅刹女・十二神将・不動明王(猿姿)が描かれている。

【下巻・第二段(絵あり)】

こゝを立のきて、南の方を見れば、軒ちかき花橘のほひは、風なつかしく、むかしの袖の香やらんとおほえ、おほ^{大荒城}あらぎの森の下草、いふせきまでにしけりあへる、たへゝに、とこなつかしきひめゆりの、はなかほはせも、めつらしく見へけるに、大なる桶とも、あまたすゑならへて、人を鮓にしおきたり、そのにほひ、つくさくなまくさくして、見るも、かわゆき事、限なし、かたわらを見れば、ふるき死骸は苔むし、新き死骸は血つきて塚のことに、山のことし、西の方をみれば、群梢^{ぐんせう}、雨にそんて、梧楸^{こしう}の色、紅なり、百菓、露結て、蘭菊の花、芳はし、われ松虫とはなけれども、心ひかるゝ、

こゑくも也、こゝに又、唐人あまた、こめおきたり、これをみるに、我朝にもかきらす、天竺、震旦の人までも、とりおきけるよとみれば、不便ともいふはかりなし、北の方には、雪にうつむ岸松の、嵐を待色、霜にあける庭の菊、秋をのこせるにほひ、いつれも目と、まりにけり、只今は、鬼とも、おほくはなけれども、十余人ぞ、ありける、そのほかは、さまく形を変して、躰を化たる物とも、おほくそありける、目もあやに覺て、本の廊に帰て、このありさまを郎等共にかたられけり、

〔絵（二場面）〕①蓑帽子姿の三人が、変化の者どもにいる建物の廊下から、庭に咲く花橘（実をつけているようにも見える）、人を鮎に仕込んだ大桶、散乱する死骸を認める。②庭には青葉の松や秋の紅葉が描かれ、建物の牢屋には唐人らしき人々が閉じ込められている。それを見張る変化の者ども、そして様子を覗う蓑帽子姿の三人。

〔下巻・第二段（絵あり。ただし、一紙分のみ）〕

（詞書欠失）

〔絵（二場面）〕①下巻・第二段の絵に見える鬼どもの建物を鎧甲を身に着けた頼光・保昌の主従が襲い、鬼どもの首を切ったり、追い散らす。

〔下巻・第四段（絵あり）〕

童子、鉄石の室をつよく構て、其中にそ臥たりける、上臈女房達、四五人置て、うてさすれなと、下知してそねたりける、何にして

も、此戸をあくへき様なかりけるに、老たる、少き、二人の僧、年来の行功只今也、本尊界会、穴賢々々、本誓誤給ふなとて、袈裟の下にて、印契を結びて、暫、祈念し給へは、かたく閑たりつる鉄石、朝の露ときえ、ゆ、しく見えつる寝所は、一時に破にけり、各打入て見ければ、昼こそ童子の形ちに変しけれども、夜は本の躰を頭はして、長五丈計なる鬼の、頭と身は赤く、左の足は黒く、右の手は黄に、右の足は白く、左の手は青く、五色にまたらきて、眼十五、角五ぞ、をひたりける、是をみるに、偏に夢の心地して、いふはかりなき有様也、されとも、各心を静めて、よりてうたんとはやりけるに、若僧の給けるは、大なる物を、其太刀にて無相違きりおほせん事、不定也、若おきあかる事もあらんは、ゆ、しき大事になりなんす、然者、我等四人して、此鬼王をとんておさへたらは、各同心に、かしら一所をきめてうてとぞ教られける、此儀、尤も可然とて、四人の客人、手足にとりつきて押へたり、鬼王、頸計をもちあけて、驥驎無極めはなきか、邪見極大めはなきか、此等にはかられて、今はかうとおほゆる敵うてやと、千声百声、叫ひければ、頸切たる鬼共、頸もなく、おきあかりて走廻り、手をひろけて、をとりけり、二人の將軍、五人の兵、同心に鬼の頸を打落つ、此鬼王の頸、天に飛登て、叫廻る事おひたし、頼光、いそぎ綱、公時、二人かかふとをこひて、我かふとの上に重て、きたまひたりけり、人々是を見て、こはいかなる事と見るところに、鬼の頸、舞落て、頼光のかふとの上にくひつきぬ、頼光の給様、眼をくしれと、給へは、綱、公時つとよりて、刀をぬきて、左右の目をくしりたりければ、鬼王の頸、死にけり、其後、甲をぬきて、見たりければ、甲二をくひとをしてそありける、

〔絵 三場面〕

①鬼姿の酒天童子が女房達に体をさすらせて寝ている寝所の鉄石の扉が打ち破られたところ。②四人の翁や僧が酒天童子の手足を押さえ、頼光・保昌主従が首を刎ねる。③童子の首が、頼光の三重の甲に食いつくところ。

【下巻・第五段 (絵あり。詞書は「別巻詞書」)】

(前紙欠)

り、又、有しきるものあらひし老女、悦いさみて帰し程に、此年比は鬼のちからにひかれて、却老延齡、いきをひも有つれ、今者、鬼王の通力も失ぬるゆゑにや、山を出かねて老かゝまりてそ、ふしたりける、渭水を別て、重てた、む呂尚父か額の浪かと疑はれ、商山を出て、なを空かりし、遠司徒か鬢のゆきかと誤たれけり、旧里に帰るとも、錦の袴をきされは、買臣の勇もなかりけり、家を離て、星霜既に二百余廻に成ぬれば、をのつから争か七世の孫をも相見へき、されともなを、旧里をおもふ心有て、都の方をそ、かへりみける、蜉蝣の齡、夕をまたぬ習にて、芭蕉の命、風にやふれしかは、いつのなしみとはなけれとも、をのくあはれにおほえて、袖をそしほりける、

〔絵 三場面〕

①殺された鬼どもが焼き払われる。②酒天童子の首を運び出す一行と救出された老若男女。③洗濯女の老女は、老い屈まりて伏してしまふ。

【下巻・第六段 (絵あり。詞書は「別巻詞書」)】

四人の客人、官□、ことゆゑなく、大江山の有し道まで帰ぬ、此時、

四人の人々申されけるは、このほどの御なこり、難忘侍るものかな、宣旨をかふり給へる、將軍達にておはしませは、打平け給はん事は、左右に及はねとも、ゆゑしき大事と□□侍て、我等、御共しつる也、今者、是より暇を申て罷歸へし、当帝をは、よの常の王とは思給へからず、昔より今にいたるまで、賢王あまた、ましますといひながら、衆生化度の方便によりて、粟散の王とは、生給へとも慈尊下生たるにて、慈氏の化儀をほとこし給ふ、されは近臣百官のために、因を、遠客諸人に及まで、めくみをあたゑましますは、本師釈尊の遺勅、誤給はさるにあらす、当来導師の教、誠にたのみ有へし、晴明と申は、秘密真言の棟梁、竜樹菩薩の变化也、昔は白道沙門とあらはれ、今者、晴明といふはかせに生たり、陰陽の秘術を、あなかに執し被思しかは、二度、さすのみこと成て、かゝる賢王の御代に仕給ふ也、頼光も我身をかろく思給へからず、致頼、頼信、維衡、保昌とて、四人の名將おはしませとも、此人数にもさしぬけて、洛中洛外の上下に恐敬はれ給事、則、五大尊の其中に大威徳の化生にてまします、其故也、然れば、悪魔降伏も世にこゑ、盜賊追討も人に勝給へる也、四人の殿原を、人、四天とよふ事、其故有るものをや、綱は多門天、公時は持国天、忠道は増長天、季武は広目天、ともに天下を哀愍し、禁中を守護し給ふ、翁かことはを疑給ふ事なかれと語られければ、是を聞く貴賤上下の輩、たな心をあはせけり、さてこそ一条の院をは、権者とあふき奉けれ、又、頼光をは、二生の人とは恐申けれ、保昌の給けるは、先世の契さとりやすく、今度の御名残、難忘、詞にも懸かたく、筆にも注しかたし、同は御形見を給て、且は後日の思出にもし、且は末代の物語にもと、被申ければ、尤もとて、翁、先、白淨衣をぬきて、保昌にたてまつる、保昌、

又是を給て、うは矢の鏹をぬきて、老翁にたてまつる、山臥は、柿の衣をぬきて、保昌に奉る、保昌は、はき給へる太刀をときて、山ふしにたてまつる、老僧、是を見給て、御かた見共、取ちか系給ふか、浦山敷侍るに、撰津守殿、いさせ給へ、かた見か系申さむとて懐より、水精の念珠を取出て、頼光にたてまつらる、其とき頼光かふとをぬきて、老僧被重る、若僧、又、金の錫杖をとり出て、頼光にたてまつりしかは、頼光は、腰のかたなを若僧にたてまつりて後、頼光、おのくの御名を誰と申奉る、御在所は何方におはしますと、尋申されければ、老翁の給けるは、我は住吉の辺の旧仁なりとて、まほろしのことくにて失給ぬ、山ふしは、熊野山、那智の辺に侍る也、名をは雲滝と申とて、是もかきつけやうに失られけり、老僧の給けるは、此僧は八幡の辺に侍るか、撰津守殿へ御祈禱のため参たりとて、雲煙のことくにて失られけり、若僧は、延暦寺の辺に住する沙門なりとて、何も皆、失られにけり、倩、此心を案するに、是併、年来、憑をかけ、志を運し霊神達、且は鎮護国家の誓により、且は利益衆生の願にまかせて、我等を守護し給けるよと、弥たのもしく、かたしけなく思奉る事限なし、凡、神の威を顕事は、是、人の崇奉るにより、人の運の全する事は、又、神の助にあらすや、たとへは響の音に応するかことく、月の水にやとるかことし、感応みちまはる事、よの常の習といひながら、いぢしるき事、上古にも末代にも、ためしすくなきこと、そおほえし、

〔絵（二場面）〕①四人の客人と二人の将軍が、別れに際して形見分けをする。

【下巻・第七段（絵あり。詞書は「別巻詞書」）】

今者、本の七人の輩と、鬼王の取置し人々、相共に、大江山のふもと、いくの、道のほとに仮庵作て、忠道を使として、いそぎ迎の馬人催して来へき由、申遣す、兒、又女房共の親類、眷属にいたるまで、此使、告廻たりければ、彼家、騒ぎ悦、の、しる事かきりなし、うれしきにも、つらきにも、先立物は涙也、輿車、馬人、思々に大江山へといそぎければ、霞を隔つるいくの、道も遠からず、あきれまとへり、或は妻にあひ、夫にあふて、夢かや、ゆめにあらさるか、うたかひ迷える人もあり、又、親を尋に、をやもなく、子を尋に、子もなきたくひ、かなしみをいたき、歎あふ事限なし、かくて、有へき事ならねは、をのゝ家ちへいそぎけり、二人の大將軍は、其すかたをあらためず、柿の衣の上に鎧をき、或は頭巾を肩半に責入て、かふとをのけ、ひた。にきなして、都へそ入られける、道々、所々、山々、関々に是を見るもの、数をしらすそ有ける、今日既に、撰津守頼光、丹後守保昌、鬼王の頸を隨身して、都へ入由、聞へしかは、彼郎等共、馳来て、両将の軍兵大勢也、見物の道俗男女、幾千万といふ数をしらす、人は踵をそはたて、車は轆をめぐらす事をえす、弓箭の家に生れ、武勇の道に入て、芸をあらはし、名をあくる事、勝計するに及はねとも、魔王、鬼神を随ふる事、田村、利仁の外は珍事なりと、声々口々にさゝめきあへり、毒鬼を大内へ入る、事有へからすとて、大路をわたされければ、主上、々皇より始奉て、撰政、関白、以下にいたるまで、車を飛てゑいらん有けり、鬼王の頸といひ、將軍の気色といひ、誠に耳目を驚かしけり、事の由を奏しければ、不思議の由、宣下有て、彼頸をは宇治の宝蔵にぞ、納られける、御堂入道大相国、御参内有て被申けるは、上古より末代にいたるまで、代々、朝敵を打なひくる輩多しといへとも、か、

る希代の勝事に及ぶ事、先蹤、承はり及はず、早速に勸賞行はるへき由、取申されしかは、丹後守保昌、西夷大將軍に成て、筑前国を給る、摂津守頼光は、東夷大將軍に被成て、陸奥国をそ給はりける、凡、大国には、一度、朝敵を平つれば半国を給て、其しやう七世にたえずと見たり、然而、我朝、本より小国なり、一国の受領は、半国の賞にもこゑたるをや、況や東西の將軍の宣旨をかふる事、莫大の勸賞たりといへとも、たれ人か支申へきと九重の上下一同に、のゝしりけり、

〔絵(二場面)〕①頼光・保昌一行が騎馬武者姿で都に凱旋。／先頭には酒天童子の首が運ばれ、多くの貴賤、道俗男女が出迎えている。

〔下巻・第八段(絵あり。詞書は静嘉堂文庫本の「別巻詞書」)〕

其後、頼光、今度の高みやうは、全、我等か威勢にあらず、且は皇徳の盛なる故、且は神威のいたす所也とて、精進して八幡宮へ参詣せられける、御神楽「」に仰られて、御宝殿の内を見せられければ、竜頭のかふとの、火おとしなるか、御影の御前に有とて取出たりければ、頼光、懷より水精の念珠の有を取出て見せられける、別当、こはいかに、御影のもたせ給へる御念珠なりと疑申ければ、事の由を語給に、参集たる人々、随喜の涙をそなかしける、此御すゝを私の物にせん事、恐有へしとて、御宝前へ入たてまつる、代々の氏神と崇たてまつる上は、擁護の馮もふかく、祈請の誠も浅からされは、助け守らせ給はん事は、さる事なれとも、まのあたり、かゝる不思議を拝見せられて、身の毛も、いよたちてぞ、おもはれける、

〔絵(三場面)〕

①頼光による八幡三所への参詣(別当が御影前にあつた「竜頭の甲」を見せている)。②頼光による日吉山王(日吉大社)参詣(本殿近くの木には猿が描かれる。また拝殿の前では、田楽が行われていた)。③保昌による住吉明神(住吉大社)参詣(朱の鳥居前には海が広がる)。
* 保昌による熊野三所(熊野権現)参詣の絵はない。

〔下巻・第九段(絵あり。詞書は「別巻詞書」)〕

(前欠か)

さる外に、魔界におかされて、家郷を離て肝をくたき、妻子を恋て魂をけす、葬を鬼脛にまち、骸を魔腹に致しき、深洞に籠られて東西をしらす、幽窟に被閉て、日月を見る事をえす、たとへは空を飛鳥の羽をぬかれ、水におよく魚の鱗をそかれたるに似たり、然を今、両將軍の威力にひかれて、魔王の悪害をまぬかる、赤子の母を得たるよりもすき、早苗の雨にあえるにもこゑたるをや、悲み悦、相並ひ、手の舞、足のふみとて、願所は柔遠の恵を垂れ、好隣の義を顧て、我等を本土へゆるし帰せ、且は此珍事によりて、明王の威験を遠方につたへ、兩將の面目を異朝に施さんと申たりければ、申上所、無謂にあらずとて、九国に下つかはして、便風を待へしと定ければ、かれら筑紫のはかたへそ下ける、唐人かんさきの津に下「」(以下欠)

〔絵(二場面)〕①神崎の津から筵帆に屋形をもつ船が、唐人を載せて出航するところ。／水先船の小舟も見える。
浜辺には見送る人々。

(終)

三 参考資料・陽明文庫本と逸翁美術館本の詞書との重複部分の相違点

陽明文庫本と逸翁美術館本の詞書との重複部分は、ほとんど同文なのであるが、一部の言い回しや固有名詞に違いがある。

(1) 言い回しなどの相違点

【上巻・第二段】

〔陽明文庫本〕

すみやかに

めされて

このむね

仰ふくめらる

定申されければ

すなわち

各申けるは

まことに

たいらけんかためな□

これは

鬼神なり

人力及かたきよし

あとを

〔逸翁美術館本〕

速に

召れて

此旨

仰含らる

定申ければ

即

各申されけるは

誠に

平けんかため也

是は

鬼神也

人力およびかたき由

跡を

いかてか

天氣にしたかはさるへきとなむ

(平出カ) 摂津守頼光・丹後守保昌

争か

天氣にしたかはさるへき

(改行なし) 摂津守頼光・丹後守保昌

保昌二人に仰られて

めさるへきよし申され

すくへからす

心さしを

仰ふくめられ

保昌等に仰せられて

めさるへき由を申され

過へからす

志を

仰含られ

罷出ぬ

煙霞東西に

風にあふときはたちまちに

これすなはち(二カ所)

徳也

罷出らる

煙霞は東西に

風にあふ時は忽に

是則(二カ所)

徳なり

□□たるをや

お□□

をしむ

忠のいたるなるかなや

思々に

惜む

【上巻・第二段】

〔陽明文庫本〕

けしきなり

各これを

〔逸翁美術館本〕

けしき也

各是を

うたかひなき変化の者と思ければ
弓をひきてむかふ処に
出て
無疑変化の物と思はれければ
弓を引てむかふところに
いて、

手をあはせて
給こと
まちたてまつる
そのゆへは
翁は
手を合て
給ふ事
待たてまつる
其故は
おきなは

とりうしなはれて
こ□□かはかりとかおもひ給
かの山□
この若僧
なげき給へは
給はりて
此欺いかはりとか思給ふ
彼山臥
此若僧
歎給へは

うけ給て
たつねむ□□
つたへうけ給はるあいた
よろ□□
御共仕て
尋向給
伝承はる間
悦を
御共つかまつりて

かのところへあいひむかはん
かたりけるに
頼光の給けるは
彼所へ相向はん
かたり申しけるに
頼光のたまいけるは

かくの給へはとて
心をゆるしたてまつるには侍らねども
かくのたまへとも
全、心をゆるしたてまつるに
はあらずなれとも

我等、宣旨をくひに
何事が侍らん
弓をなをして
至極して
もとめいたすへきとはかる
我等は、宣旨を頭に
何条事かあるへき
弓をゆるしぬ
至極おこないひて
求出へき様をはからふ

白翁申けるは、そのすかたともに
たつね給はんこと
たとひ兄弟
あふこと
すかたをやつし
白翁申されけるは、其すかた
共に
尋給はん事
縦あにおと、
あふ事
すかたをやつして

やうをかへて
たつねみ給へ
柿の袈裟
頭巾なと、り□□にきて
様をかへて
尋み給へ
柿袈裟
頭巾なんと取いたして、とり
くゝに

おいといふ物九ちやう
なかより取出して
負といふ物九丁
中よりとりいたして

かのを「」

彼負に

(2) 固有名詞の相違点

〔陽明文庫本〕

〔逸翁美術館本〕

閑院の左大臣実躬卿

閑院の右大臣実見卿

平貞通

平忠道〔別巻詞書〕

天台座主慈恵大師（推定）

天台座主慈覚大師

* 右の固有名詞の違いが、いかなる意味を有しているかについては、前掲拙著の第六章で詳しく論じたところであり、参照願いたい。

四 まとめにかえて

① 上巻・第二段での陽明文庫本による「撰津守頼光、丹後守保昌」への改行が平出だとすれば、両本の制作主体の性格に深くかわらう。

② 逸翁美術館本が、陽明文庫本と比べて、漢字を多用していること、他方で漢字への振り仮名が多くふられていることは、逸翁美術館本の性格にかかわらう。

③ 逸翁美術館本において、「此鬼王をとんでおさへたらは」(下巻・第四段中頃)や「雪山」(上巻・第五段末近く)の振り仮名のように、「ッ」(促音便)が「ン」(撥音便)と表記されていること(それが実際の発音に近かったであろう)にも注目しておきたい。ちなみに、下総国の「香取文書」(香取神宮に關係する社家文書)の売券(土地などの売買文書)などに、「ゝをもつ(っ)て」が「もんで」と

表記されることが多くある。陽明文庫本の上巻・第一段(本紹介の三三頁下段の中ほど)には、「なけ」「よつて」とあり、陽明文庫本は促音便を「つ」と表記しているようである。

④ また別の箇所では、陽明文庫本で「頭巾なと、り」「」(上巻・第三段末近く)とあるのが、逸翁美術館本では「頭巾なんと取いたして」とあり、「など」を「なんと」と表記している。「など」については、小学館『日本国語大辞典』によれば、「なにと」が語源で *nanito* → *nando* → *nudo* と変化したと考えられるとあり、中古には「など」と表記されても「なんと」の発音であった可能性もあるという。逸翁美術館本には、「岩のかとなんとに」(上巻・第四段三行目)や「金の鉢なんとに」(上巻・第六段二行目)ともある。

註

(1) 横山愛「解説・大江山酒天童子」(横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第三 角川書店、一九七五年)、榊原悟「大江山絵詞」小解(『続日本絵巻大成19』、中央公論社、一九八四年)、高橋昌明「大江山絵詞」復元の試み(『同「酒呑童子の誕生」もうひとつの日本文化』中公論新社、二〇〇五年所収。初出一九八九年)

(2) 〈逸翁美術館本〉については、

① 『続日本絵巻物集成』(雄山閣、一九四二年)所収「大江山絵詞」
② 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第三』(前掲)所収「七二 大江山酒天童子(逸翁美術館蔵古絵巻)」

- ③ 『続日本絵巻大成19』(前掲) 所収「大江山絵詞」
- ④ 『続日本の絵巻26』(前掲) 所収「大江山絵詞」
- 〈陽明文庫本〉については、
- ① 榊原悟編「公刊・陽明文庫本「酒天童子物語絵詞」」(前掲『続日本絵巻大成19』所収) がある。
- (3) インターネット上に、「現存最古の酒呑童子説話『大江山絵詞』(香取本)の絵巻物の詞書の文章や釈文や現代語訳や詞書・絵図の並び順など」というサイトがあり、高橋説にもとづいた釈文等の復元が提示されている。参照されたい。 <https://wisdomingle.com/oeyama-ekotoba-narrative-caption-texts-the-picture-scroll-of-shuten-doji-the-oni-king/> [By Yकिनobu Kurata (倉田幸暢)] (最終閲覧2020年1月24日)
- (追記) 拙著『酒天童子絵巻の謎』に対しては、『東京(中日)新聞』(二〇一九年九月一日朝刊)に川尻秋生氏が、『図書新聞』(三四二二号、同年一月二日)に高橋修氏が、『北海道高等学校日本史研究会会報』(三六号、二〇二〇年一月)に國岡健氏が書評して下さっている。また、学術雑誌の『日本史研究』(六八七号、二〇一九年一月)にも異例の早さで高橋昌明氏の書評・批判が掲載され、私が無勉強なための誤りをご指摘いただいている。書評された諸氏に感謝申し上げます。
- なお、逸翁美術館本の成立に関しては、拙著と同様にいくつかの推測が可能であろうが、文献史料上で明確になっていることは、①天正一八年(一五九〇)までには、千葉氏一族の大須賀氏が所持していたこと、②その後、「八幡太刀・駒角・午(牛)之玉」

とともに香取大宮司家に伝来したこと、③下総千葉氏の氏寺神であった千葉妙見社(妙見寺)周辺には、江戸時代までに亜流の酒天童子退治説話と「源頼光家来の宝生の太刀」を所持するといった伝承が成立していたこと、④そしてさらに重要なことは、本紹介が課題とした陽明文庫本と逸翁美術館本の詞書(含む「別巻詞書」)の文言が相違すること(なかでも「平貞通」と「平忠道」の違い)である。

なにゆえに後者では「平忠道」なのか。高橋昌明氏のご批判にもかからず、拙著『酒天童子絵巻の謎』での推測に今のところ根本的な間違いはないと考えている。

受領日 二〇一九年九月一七日
受理日 二〇一九年一月六日